

職業訓練は楽しい

川崎重工業から雇用促進事業団へ転職したのが平成元年，早くも11年が過ぎた。入団面接で「雇用促進事業団とは何ですか？」と尋ねると，一人の面接官が「あなたが住んでいる住宅の入口の看板を見てください」と言われ，帰って見ると確かに書いてあった。これが私と事業団の出会いである。

大阪生まれの大阪育ちでありながら私はあまり都会生活が好きではなく，入団面接で勤務地の希望を尋ねられ「どこでも行きます。地方ならば…」と答えると，後で東京短大に行けと言われ慌てて入団を断った。すると，再度希望を聞き入れてくれ，「富士山から西をお願いします」と言うと，岡山短大に変更してくれた。当時は人事にもゆとりがあったのだと思う。

入団した私はひとつ驚いたことがあった。職業訓練校は離職者の職業転換教育をするものと思っていた。聞くと職業訓練短大は高校卒業の専門課程しかないと言われ，当てが外れた。入団希望として重工業で社内の職種転換教育を少し手伝ったことがあり，社会人の技術教育ができると思いきや勝手に思い込んでいたのである。

入団1年目，新しい学科（制御技術科）のカリキュラム作りを学生と楽しんでいたところ，1つの転機が訪れた。社会人向けの能力開発セミナーを実施するとのこと，岡山短大では対策委員会を開き，この事業を進めるという。これが後に企画員へと発展するのだが，私にとって職業訓練の中で何かが始まる期待感があった。その後，続々と新しい事業が起きた。高齢者を対象にしたマスターコース，ポリテクセンター等の指導員を対象にした短期実践教育，

工業高校の先生を対象にした職種転換教育，海外職業訓練指導員を受け入れての技術研修と，次から次に仕事が舞い込んできた。

当時の私には1つ疑問があった。誰がこの仕事をつくるのだろうか，そのときの答えは当時の課長が企ててくるのだと思った。というのも，アフリカ行き短期専門家派遣のオマケまでくれたからだ。

4年目に職業能力開発大学の研究課程卒業の新任先生（リレートーク依頼者の柳先生）が来られた。このころ，私には1つの悩みがあった。専門課程を疎かにしていないかという不安である。そこで，当時の先生に相談してロボット製作を通じて制御技術科の特徴を出そう。その評価として広く地域の人たちに呼びかけ，意見を聞こうと提案した。計画当初は技術が先行し運営が悪く批判も多かったが，平成8年，実施して3年目に岡山短大で初めて地域参加のロボット競技会（ロボテック）が開催された。地元テレビ局が1時間の番組製作を行ったこともあり，今では学生との良き思い出となった。

ロボット競技が軌道に乗り出した頃，企画員をしていた私に新たな課題がもちあがった。団体方式への取り組みである。この頃は 協同組合と看板を見れば車を止めてバックしたり，団体の新年会に呼ばれたり，車内と学校以外で仕事することが多くなった。団体方式の成果としては地元玉島の製造業を集めて，平成8年に玉島工業会なる新たな団体が結成できたことが，企業との付き合いを深めてくれた。

当時の私には1つやり残しているような気がしてならなかったことがあった。それは，台湾の海外指

導員研修生が「なぜ長期専門家として再度海外に出ないのか?」という疑問に答えられず、そのままにしていたからだ。これがきっかけで、平成8年5月から3年間、フィリピン職業訓練向上計画に参加した。そして、平成11年4月に帰国、10月には雇

用・能力開発機構として船出する職業訓練に、再び新たな期待を寄せているのは私だけではないと考える。

また、このリレートークもフィリピン時代にお世話になった久米先生へと引き継ぎたい。

リレートーク【2】

宮城障害者職業能力開発校 大坪 英明

18年ぶりに能開大の学生になってみて

熊本県立熊本高等技術訓練校の垣下君より、パトタッチをされて、今回のリレートークを書くことになりました。彼とは職業訓練大学の塗装科15期の同級生であるばかりでなく、同じアパートの同志でもありました。特に運動神経は卓越していて、世の中にこんなに反射神経が良い奴がいるのか!!とよく感心させられた思い出があります。

さて、このような、かつて若かった塗装科の面々もいんな意味で変化が激しく、そして、それは身体の外観にも如実に現れており、突然面会すると誰だかわからない。しかし、額を手で覆ったり、頬を両手で押さえたりすると「ああ、そうかお前か!」と判別できる年齢になってきて、少々空しさを感じてしまいます。

また、塗装科自体もご多分に漏れずその後変遷を重ね、そして地方の指導員の職種にも影響を及ぼし、職種転換という道を歩まれた方もいらっしゃると思います。今回は、私が6年前に受講した職業能力開発大学校での専門課程研修(俗にいう職種転換訓練)

での思い出を書き連ねてみたいと思います。

私は塗装科から情報処理科の専門課程を受講しましたが、その場合職種が関連していないため1年の研修期間となりました。ちなみに、関連職種の科の場合は半年であり、結局専門課程の場合、二通りの研修期間の人が、原則として研修寮で寝起きを共にすることになります。受講形態については基本的に長期訓練課程の2・3年の授業にそのまま参加することになります。受講待遇も全く学生そのもので、試験もあるし、レポートもある。そして、講義だけはなぜか研修生の皆さん一丸となって一番前で受講するものだから、能開大の学生諸君は一番わかっているものだと思いきや勝手に勘違いをして、試験前に聞きに来たりする。これが一番閉口する。単に黒板がよく見えないだけだと、なぜわかってくれない。そして、最も痛感するのが「記憶が悪くなった」ということです。来週までの課題を来週まで放っておくと解き方がわからなくなる。かといって元来の性格からすぐにはやりたくない、結局1年間この葛藤は続いた

と思います。しかし、たまには学生生活も楽しいもので、休みの日には専門課程の仲間と津久井湖へ行ったり、町田の方へ買い物へ出かけたりと、各地を徘徊した楽しい思い出がありました。

また、講義内容について、よく仲間と現場での職業訓練科目内容との相違が話題になりました。現場の職業訓練はあくまで民間への直接の就職を目指した技術の構築であり、知識の付与になります。それに対して長期指導員課程の場合、指導員の育成が主体であり、その4年間の授業形態の中に現役の指導員が専門課程という枠の中で現場にマッチした職業訓練を期待し受講しようとしても少々無理があると思います。結局自分が望む物については、その体系が他人にはなかなか理解しがたいため時間に余裕があるときに、自分で勉強することだと納得した記憶があります。そして、そのように早く割り切り、切り替えることが、長期の専門課程の機会をうまく精神的にも乗り切る手段だと思いました。

最後になりますが、研修受講期間現場で支えてくれた指導員の皆さまにお礼申し上げますとともに、これから他の職種へチャレンジする方へエールを送りたいと思います。

今回は、亀戸技術専門校の宮崎さん、お願いします。

